病院ボランティア活動の基本的な考え方とその実際

石垣靖子

第59回国立病院総合医学会
（平成17年10月15日　於広島）

IRYO　Vol. 61　No. 4（268－270）2007

要旨　在院日数の短縮化や医療必要度の高い人たちが増えていくなかで，患者にとっても職員にとっても病院ボランティアの存在はますます重要になってきた．しかし，多忙な業務の補完的な役割としてボランティアを導入する施設もある．本来，病院ボランティアは当該施設の理念にそって，ボランティアの主体的かつ自立的な活動を尊重し病院職員と共生する存在でなければならない．東札幌病院の歴史と共に歩んできた創造的かつ幅広いボランティア活動は，医療の中に日常性をもたらし，結果的に医療の質向上に貢献していると結論した．

キーワード　自立（律），共生，ボランティア・イン・スピリット，創造性

はじめに

「病院では悪人ではなく善良な人がナイフを持ち，人を切り裂いている．そこでは善人が人に針を刺し肛門や膣に指を入れ，尿道に管を入れ，赤ん坊の頭皮に針を刺す．また，善人が，泣き叫ぶ熱傷者の死んだ皮膚をはがし，初対面の人に服を脱ぐように命令する．……（中略）一般人にとって身の毛のよだつ残酷物語も，ここでは専門家の商売なのだ．」[1]．これは社会学者ダニエル・チャンブリスが著した「ケアの向こう側」の冒頭の文章である．病院がいかに一般社会と異なった＜ルーチン＞を持っているか，その中で仕事をしている者はほとんど気づいていない．

病人は病院ではすべて患者（patient：耐える人）として扱われ，＜屈辱的な検査＞や＜侵襲的な処置＞にひらすら耐えている．ここでは，個々人の生物学的な生命が医療の焦点であり，その結果，患者は病気に付随する存在として自己を認識するようになる．それは自尊の感情や自己効力感をきわめて低下させることになる．病院という環境では，患者は個々人の日常生活のこまごましたことについては，たとえそれが日頃の自分の生活とはかけ離れたことであっても，耐えなければならないことが多い．そのような状況にいる患者にとって，同じ地域住民としてのボランティアが身近にいることは大きな意味を持つ．「病院ボランティアは患者と同じ地域住民として医療の場に参加し，日常と隣り合わせの非日常を患者と共有しながら，日常性を患者にもたらすという重要な役割を果たしている．しかもそれは，医療の場で見落とされがちな患者の＜生活＞への細やかな配慮とやさしさに満ち満ちているのである．同じ地域住民の目線を大切にしながら．……（中略）医療の場では，患者―医療者関係は直線的になりがちであるが，毎日繰り返される無数の直線の上に，色とりどりの横糸を織り交ぜて，患者の生活の営みを支えているのがボランティアたちなのである．まさにボランティアとは共生のネットワーカーなの

医療法人東札幌病院　副院長（北海道医療大学大学院看護福祉学科研究科）
別刷請求先：石垣靖子　医療法人東札幌病院　副院長　〒003-8585　札幌市白石区東札幌3条3丁目7番35号
（平成18年3月2日受付，平成19年2月16日受理）
Basic Concept about Hospital Volunteer Activities and Practice　　Yasuko Ishigaki
Key Words：independence/autonomy, live together, volunteer in spirit, creativeness

だ.」[2]

在院日数の短縮や高齢者，医療必要度の高い人たちが増え，病院の環境がますます厳しくなってきた昨今，患者にとっても職員にとっても病院ボランティアの存在はますます重要になってきた.

自立（律）と共生

1983年「医療の本質はやさしさ」を基本理念に開院した東札幌病院はボランティアと共に23年の歴史を刻んできた．私たちは「やさしさ」を「人間主義」と理解している．すなわち「異なる社会，異なる文化に属する人々が互いに対等な人間同士として認め合い，人類共同体を構成し，その一員としてふさわしく協力し合うと説く人間尊重の思想である.」[3]．医療専門職集団とボランティアが対等な人間同士として目標を共有し，協働できることが患者―医療者間にも対等性を築けることに他ならない.

東札幌病院ボランティアグループ<いずみ>のパンフレットには，ボランティア活動について次のように述べている．①対象者の主体性を尊重し，自立を支援する活動．②コミュニケーションの積み重ねによって創造される活動．③対等な人間関係における心の相互交流の活動．④自発的な学びと実践と検証による生涯学習の活動．⑤人と人を結ぶネットワーク作りの活動，の５項目である．この活動をサポートすることが病院側の大きな役割であり，ボランティア活動の基本的な精神は，そのまま医療者とボランティアとの関係に共通するものでもある．私たち医療者はボランティアの自己実現をサポートし，さまざまなボランティア活動の創造性に敬意をもつことが重要であり，医療やケアの補完は結果であって決して目的ではない.

考えてみれば私たちも日常，患者・家族やボランティアたちと関係しあいながらケアをしていることになる．それは，困難と向かい合って生きている人の姿勢に共感し，自分のこととして考え，自らすすんでその人と関わっていこうとする気持ちから始まる．これを私たちは「ボランティア・イン・スピリット」とよんでいる.すなわちボランティア・イン・スピリットは単にボランティアだけのものではなく，私たち医療者と共通する価値観なのである．病院ボランティアの導入に際しては，この基本姿勢の確認が最も重要で，医療者―ボランティア関係において対等な関係を築き，共生できるかがその成否を決めるといっても過言ではない．しかもそれは，病院の組織文化として職員に浸透し，定着していなければならないのである．私たち医療者にとってそれは困難なことではない．なぜなら患者・家族との関係ではそれは当然のこととして日々の実践のなかに活かされているからである.

医療専門職間のチーム医療がうまく機能するためには，それぞれの専門職が専門性に優れ主体的であることが条件であると同様に，ボランティアもまた主体的であり，自立していることが医療者との共生の条件になることはいうまでもない.

ボランティア活動<ある一つの歴史>

東札幌病院は開院に先立つ１年前から一般市民や福祉を学ぶ学生たちで組織されたボランティアグループとともに準備を進めてきた．現在のボランティアグループ<いずみ>の基礎を作った人たちである．1983年当時，北海道はもとより全国でも前述した病院ボランティアに対する基本姿勢のもとに自立（律）して直接患者・家族に接するボランティア活動はほとんどなかった時代である．湧きいでる泉のように，さわやかに絶えることのないボランティア精神で活動していきたいと<いずみ>と名付けられたボランティアグループは病院の歴史と共に歩み成長を続けてきた．この歴史はまぎれもなく日本におけるボランティア・イン・スピリットを重視した病院ボランティアの歴史と重なる.

東札幌病院におけるボランティア活動の最初は窓口を相談室に置き，メディカル・ソーシャル・ワーカーがコーディネーターとして活動を推進してきた．1995年からはメンバーのなかから専任のコーディネーターが誕生し正式に病院職員となったのである．コーディネーターが専任になってからは，ボランティア活動はよりきめ細かに患者・家族の日常生活をサポートできるようになった．また，一般市民の視点から病院の各委員会（たとえば臨床倫理委員会や患者サービス委員会など）のメンバーとして参加し，医療の受け手の立場に立った積極的な発言をすることは結果的に医療の質向上にも貢献することになった．コーディネーターはボランティア教育・研修の責任者でもあり，老若男女で構成されるボランティアメンバー一人一人のサポーターでもある.

季節の行事や各病棟にある患者図書の整理，牛乳パックから作る世界でただ一枚のバースデイカード，

病棟での患者・家族に添った様々な活動，コスモスコンサートなどで始まった活動は，いまや定期的なものが24種類，不定期に企画されるもの50種類を超えて大きく成長している．

おわりに

2年前，私の部屋がボランティアルームの近くに移ってから，ボランティアの活動がより身近に見えてきた．こつこつと目立たない活動がよくわかり，それが医療やケアをどれほど支えていることかを改めて感じている．とくに時間外や土曜日の午後，そして日曜日や祝祭日の活動が活発なことに驚いている．150回を超えたコスモスコンサートや，手作りのポップコーンやハーブティーをいただきながらのナイトシアター，ワンワンパークも私の楽しみの一つだ．10頭前後のセラピー犬が日曜日の午後やってくる．顔中をなめられてご満悦の患者や家族も多い．時間外の活動は日常の慌ただしさから解放されているせいか，よりゆったりとして気持ちがほぐれる．

医療は優れた専門性と同時に，一人の地域住民としての普通の感覚を忘れないことだ．それは病む人やその家族と同じ目線にたてることであり，同時にそれは医療者にとって心のバランスをとることにもなる．ボランティアの活動はいつもそれに気づかせてくれる．東札幌病院の歴史と共に歩んできたボランティア活動は，患者・家族とボランティアのニーズにマッチングしながら常に進化してきた．この創造性と数多い活動を通してボランティア一人一人が体得する自己実現は，まさにケアの本質を具体化したものにほかならない．

［引用・参考文献］

1）Daniel F. Chambliss，浅野祐子訳：ケアの向こう側．日本看護協会出版会，東京，p.19，2002
2）石垣靖子：病院ボランティアは病院を活性化する．病院 58：556-558，1999
3）橋爪大三郎：はじめての構造主義．講談社現代新書，講談社，東京，p.22，1988